

有島武郎研究

— 著作集第五輯『迷路』をめぐって (一) —

宮野光男

「有島武郎研究—著作集第五輯『迷路』をめぐって (一) —」(以下(一)と称する)において、『迷路』の序篇「首途」が、主人公Aの否定的自己認識をふまえた「首途」であったことを、つまり、人間が、孤独な存在であり、愛なき生活者であるかぎり、いかなる状況にあつても、人生は「荒野」でしかないものであることを指摘した。本論は、その人生における荒野性を、闇の認識において実感したことを形象している「迷路」本篇(「迷路」、「暁暗」)についての考察である。

又新しい荒野が僕の前には展げようとしてゐる。そこを旅して行く唯一人の旅客。夕べには石を枕にして冷やかに眠らねばなるまい。朝な夕なには長い一つの影を牽いて淋しく歩まねばなるまい。(某年九月二日)

イポリータのさし出すピヤトリスの心臓に象徴される「愛」を通して聖化を願ひ、新生を希求したAが、「二度と再び頼るまじきも

有島武郎研究 — 著作集第五輯『迷路』をめぐって (一) —

のに頼みをかけてはならぬ。而して是れから実行的に築き上げて行く自己といふものに死の如く強い執着を撃いで行く外はない、と覚悟したにもかかわらず、そこに見出したものは、A人の世にあるは影にことならず、孤独な旅人としての自己でしかなかつのである。

それは、ヤコブが、「石をとり枕となして」、A臥して寝ねた時に見ることできた恵みの約束、来るべき契約の地カナンへの復帰の希望とは裏腹の、「荒野」への旅立ちの予感だったのである。

有島の、人生に対する荒野意識が、相当根深いものであつたことは、死後発見された絶筆短歌十首のうちの一ひとつ、

道はなし世に道はなし心して荒野の土に汝が足を置け
によつても明らかなところである。

荒野とは、いかなる状況をいうのであろう。それは、「古代的見解によれば、大洋、大海、深淵と同じように、 A 地獄」(冥府・下

界)に極めて近似した場所であるVと言われているところであり、
△混沌、曠空(否定するもの、無)、暗黒、深淵Vの世界なのであ
る。近代的見解をもってすれば、カール・バルトのいうところの
△荒野の事態Vを意味しているところでもある。
そして、そこは、

運命が神であり、死が神であり、掟と良心が神であり、自己自身
が神である世界。それは何と堪え難い、自由のない、窒息しそ
うな運命の牢獄、△暗黒な部屋V(バルト)

と呼ぶにふさわしいところなのである。

このような、人間性における荒野性の認識が、有島の基本的な人
間観に基づいているものであることは、「或る女」の葉子像にみら
れる△深淵転落感Vが、△荒野の事態Vの一顕現であることから明
らかであるが、「迷路」序篇「首途」におけるAの否定的自己認
識の顕現である△荒野V性の指摘は、「実験室」(大6・9)など
における△荒野V性認識とともに、その前兆ともいべきものなの
である。

二

僕的首途は血祭りで呪はれた。或は血祭りで祝福された。「中略」
蹉跌を恐れてはならぬ。善悪醜美―僕のあらゆる力を集めて如実
に生活して行かう。僕はもつと自由に、もつと厳粛にならねばな
らぬ。僕はそんな生活に堪へ得られるだろうか。……然し今の場

合になつて躊躇は無益だ。

揺れ動き、ややもすれば怯もうとする魂を鞭打ちながら、不可能
の可能を求めようとするAの、必死の姿が描かれているところであ
る。そして、その後が続く、△唯静かに、静かに、静かにVとい
う繰り返しは、一面において、逸る心への戒めのように思われる
が、それと同時に、見つめなくてはならぬ自己内部の、ただならぬ
様に対する警告でもあるように思われる。

ハーバード大学に入学したAの発見した、ただならぬものを内に
秘めた自己とは何であつたかといへば、それは闇の認識である。

彼に与へられた命力は働きかける対象を失つたために、彼の肉体
の中で、のたうちまはつて苦しんだ。その力は色と形とを失つた暗
い渾沌に還つた。謂はゞ飽電しながら、それを発散する機縁を失
つた黒雲のやうに、力強い非形が彼の心に満ちてゐた。我れ
ながらその虚無の力を彼はあつかひあぐんだ。おまけに衣食の問
題に頭を悩まさないですむ境遇に置かれるので、その暗い力は純
粋に暗くなつて行つた。手がりのない暗さだつた。

△彼には、そこまで還元した事が恐ろしい以上に物凄かつたV、
というように、Aの存在そのものが、闇の存在であることを、デモ
―ニッシュな存在であるかのごとく感得しているAであることを、
有島はこのように描いている。

Aが自己の内部にひそむ悪魔性を、具体的に実感するのは、共同

生活をしている弁護士Pが、週に一度、友人と称して一人の婦人をつれて来るときにひき起される混乱状況においてであるが、有島はそれを、△罪の思ひ出のみに生きるカインのやう▽なものとして描いているように、有島の基本的な否定的自己認識の一種のヴァリエーションであり、すでに(一)で述べたように、「首途」におけるAの自己認識と基本的には等質のものであるが、この内面性における否定は、時には街灯の下を歩くときにできる彼自身の影法師の△黒い濃い影▽に、△どす黒いまでに血の氣を失つて、険しく眼のすわつた顔付をしながら、彼は延びたり縮んだりする自分の影ををかしがつて、どこまでも歩いて行く▽姿として描かれ、あるいはまた、ボストン郊外の農場で労働をしたおりに、夜中悪夢に襲われて目覚めたAが、闇の中にいる自己を発見すると同時に、△何処にも光はな▽く、△死の谷に一步々々落ちて行く魂魄のやうな寒い淋しさを感じ始めた▽という意味での、自己内面の闇の認識として、繰り返し描かれているのである。

いうまでもなく、人間の内面における闇の認識は、精神状況としての荒野性、△荒野の事態▽の一顕現である。

三

人間存在における闇の認識を、実感としてAにもたらしたものは、愛の欠如である。

僕は皆んな解つた。愛だK！愛だつたんだ僕が探してゐたのは。

M教授の娘ジュリアー父の研究室で助手をしていた彼女とともに働いていたAだったのである——に恋心を抱き、その愛を掌中のものにしたと錯覚したAの△有頂天▽の気分は、△矢張りこの世界は完全なんだ。僕は自分を未完成品だと思つてゐた。何か足りない所があると思つてゐた。その通りだつた。そうしたらそれが今日見附かつたんだ▽、と、ジュリアの愛の発見において最高調に達しているのである。

「迷路」には、有島の他の作品と同様に、さまざまな人間関係が描かれており、就中女性関係は、有島文学における愛の諸相のひとつの具体例であるが、ジュリアとの関係は、先にも述べたように、Aに最も欠けているものが愛であることを知らしめるひとつの契機であると同時に、愛の仮面をつけ、人間を闇の深淵に陥落せしめたときの悪魔の嘲笑を、聞かせる存在でもあつたのである。

Aにとつて、ジュリアは△保護女神▽的存在であつた。つまり△愛に充ち満ちた言葉に潤▽うことのできる女性、△彼を幸福にさせるの行くべき道を暗示▽することのできる女性、△愛に眼ざめ▽させる女性、そして△罪惡の呵責から彼を庇つてくれる▽女性なのである。時に見せる△流觴▽は、Aの中に育つた愛を、完全に受容してくれる存在であることの徴憑のように思われてもしかたないほどに魅力的でもあつたのである。

しかも、Aに対する妹フロラの思いを語つて聞かせるジュリアの言葉——△フロラがどれ程内所であなを愛してゐるかをお知らせする為めに……▽は、Aのジュリアへの思いを募らせるための、一種の媚態とも思えるものであつたのに、所詮は、それらすべてのもの

が、ジュリアの、恋の気分を楽しむための遊びでしかなかつたことを思い知らされるに及んで、Aはいたく傷ついてしまうのである。

ジュリアのAに対する姿勢が、その日常性において、あるいは人種のちがいを盾に深い交際を拒否するそのしかたにおいて、人間の誠実な生きかたの問題として問われていないことには、いささか抵抗を感じるころでもあるが、それは、この作品が、Aの、愛を求めの姿勢そのものが意味をもっているからであつて、いわばAのひとりずもうの状況が描かれることが主意だからであらう。ジュリア像の印象の稀薄さは、砂漠にあつて水を求める旅人のように―その質を問う余裕すらない状況にあつて―ひたすら求め続けているAを描くことに力点がおかれていることからくる特色なのである。

そのように考えると、A「俺はジュリアのおもちやになつてゐたのだ。俺は何んたるたはけものだ!」Vと、その愚かさを思ひ知つた後のAの、常識的には、臆面もない、はしたないと思われるような心の動きも理解することができるのである。

A「俺はどうかして間違つてゐただけなんだ」V、

咄嗟に彼の頭に閃いたものはフロラだつた。その姿は忽ち彼の心の中を一杯に領してしまつた。この急激な変化を彼は少しも怪しまなかつた。彼が本当に愛さねばならなかつたものはフロラであるのを前から知り抜いてゐるものゝ如くに怪しまなかつた「、」

というAの思いには、まさにA愛情乞食^(註)の面目躍如たるものが

あるが、A間違つてゐただけだVというところに、自らの思いの正当化志向の激しさを見ることができるのである。

ジュリアに比較して、静かな印象を与えるフロラ―彼女はA落魄した王女のように、淑やかな可憐な處女Vのような印象をもつ女性で、ハーバード大学の図書館員として働いているのである―が、もしAに対して何らかの関心を抱いていたとすれば、それは若い女性の、若い男性に対する、一般的な、自然な感情以上のものではなかつたにちがいない。ジュリアの示したフロラの記事に記されたAの名前の徒ら書きも、よしんばフロラの筆跡であつたとしても、それは処女の秘められた思いの、青春の日の一頁にとどめられたものであり、公開さるべき性質のものではないのである。

フロラは、A悪戯らしい、蠱惑的な微笑Vをもつたジュリアに比べて、A静かな女Vとしての印象を与える彼女自体は、いわゆる運命の女性的な存在ではなかつたのである。それにもかかわらず、Aにとっては、フロラがA肉情を―誘うV存在であり、A彼女は寢床の中で彼女のしなやかな、すこやかな、若々しい肉体を眼の前にあるやうに想像し始めた。彼の欲念は段々いらだたつて来て、制御しがたい奇怪な血の運行が彼の肉を擦つたり刺戟したりし出したVというところに、このときAが、女性に対して何を求めていたかを知ることができるのである。

もち論、これはAのA妄想Vである。そうであるがゆえに、Aの求めている愛が、精神性のみに偏つたものではなく、むしろ肉體性を強調するところに、失われた人間性を回復しようとする思いがこ

められているのであろう。

生れるとから半分だけしか持つて来なかつた彼の心をフロラが持つて生れてゐて、残りの半分を、自分では気が付かぬながらに、一心に探し求めてゐる、その物足りない淋しさをフロラはあの澄み透つて真実な眼に集めて、彼を見てゐたやうに思はれた。

そして、その眼にみつめられながら、妄想は限りなく展開してゆくのである。

*
プラトンのいう人間の割符説(注)にみられるような、肉体の愛の自己完結性の一方の極に位置づけられるのが、P 弁護士夫人との関係である。

弁護士Pと別居をしている夫人のしかけた△陥穽▽にかかつてしまったAは、愛のない性的関係を結び、

二人とも虚言のつき合ひだといふ事は萬々承知しながら、互に嫌つてゐるのではないと證明し合つて、禁断の木の果を敵同志の内から盗み取る

ことに躍起となる。そして、△パロの妻に対してヨセフがしたやうな潔い態度(注)を取るべき時が来ているのを▽、Aは△十分知つてゐた▽にもかかわらず、肉欲の深みにはまり込んで行くのである。

それは、文字通り△醜交▽である。結局はP夫人の、Aをつなぎ

有島武郎研究 — 著作集第五輯「迷路」をめぐる (一) —

止めておくための手筈であつた懐妊されたも、Aの内面にある可能性の、ありうべき結果のひとつの表現であり、事実の有無にかかわらず、Aの、この事件にかかわるすべての判断、決断、逡巡の背後にあるものは、自己正当化を志向しているという意味において、P夫人と同様醜悪である。

P夫人の胎内に宿っていると信じていた胎児に対すわAの思い——△私は父の権利を要求する▽——に現わされた父親としての感情にしても、所詮は自己満足の顕現でしかない。いわば自己陶醉の道見立てでしかないのである。そのことは、P夫人への脅迫じみた要求に対する反省——△彼は全く気付かずにあつた物凄く恐ろしいものが自分の心のどん底にうごめいているのに始めて気がついた▽——に見られるように、エゴイズムの一変形なのである。

ジュリアに対する愛の背後にあるもの、フロラに対する愛の背後にあるものが、結局のところエゴイズムの一変形である自己救済を志向するものであつたという意味で、対称的であると思われる人間関係における愛の諸相は、いずれも同根異株のものであつたということができよう。それは、P夫人の懐妊をして、スコット博士の言葉をもつて表現されている△償ひをする事が出来ない▽△悪▽、つまり罪という一点に収斂するものなのである。

四

人生における荒野、それは一面において、愛の砂漠の様相をともなつたAの現実であつた。そして、それは罪の結果としての地獄の

予兆としての不安となつてAの現実となつたのである。

「お前が基督教徒な以上は意識的に悪いと思ふ事は露程でもしてはならない。お前は金輪際その償ひをする事が出来ないから」

スコット博士のこの言葉は、不信仰宣言をしてしまい、その確認をすませてしまつたAであるからには、「『首途』某年八月十四日」、もはや恐れる必要のない言葉であるはずである。それにもかかわらず、Aぞつとして奇妙な悪寒を水月のあたりみづおちに感じVなければならなかつたのはなぜであろう。

それは、A彼の身近には何か魂のあるものが黙つて立つてゐるやうに思はれ「た。」彼の心の底までを見ぬかうとぎゆつと睨みつけてゐる者があるらしかつたVからである。

AにはA予定V、A輪廻Vが無色透明化された運命観が、その内面に定着していることは、すでに(一)で述べたが、それが、「迷路」においても継承されていることを知ることのできる場所である。しかも、それがA運命Vであり、A残酷な運命の手Vは、A一度輝かしい愛の姿に変わらうとした彼の若い力VをA踏み躪Vつてしまひ、しかも彼は、Aその力に引きずられて行く所まで行つて見るより外はなVいと思わざるをえなかつたというのである。

A人生とは畢竟運命の玩具箱だVとAはいう。この人生観から生れてくるのはA偶然V論である。それは、A順当に立つものに誇るべき何物もないやうに、逆立ちするものにも恥づべき何物もないのだ。総ては欠伸あひげにしか値しない程平等だVという虚無思想をもち

すのである。

このAの運命観が、P夫人の胎内に宿つた幻の胎児に関わるAの思ひとして展開しているので、胎児の問題が解決すれば雲散霧消してしまふものであるようにも思われるが、一種の危機状況に対する説明と解決法の模索のなかに位置づけられている運命観であるという意味で、「首途」における運命観の、一種の展開として位置づけることができるものでもある。

A何故小さな一つの肉塊にそれ程の執着を繋げなければならないのだVとAはいふかつて。Aおまけにその肉塊は愛の満足の結果ではない。醜い偶然が生み出した自然の悪戯に過ぎないVものではないか、と。

実は、このところに、Aの問に対する答えが、換言すれば、運命を、その虚無状況を越えようとするAの論理を見出すことができるのである。

A人生が偶然であれ必然であれ、そんな事はどうでもよかつた。生れて来るべきその子を彼自身のものにするのが第一の事だつたVという思ひには、現実的な意味での子供の将来に対する危惧の念を見ることが出来る。しかし、Aどんな方法でもその子を自分が所有するVというAの決意には、愛の欠落―換言すれば意志的決断の欠落の結果としてのA肉塊Vに、再び生命を付与したいという、つまり、愛の再生の願望を見出すことができるのである。そのことによつて、偶然という名の虚無も、必然という名の非人間化も、つまり運命そのものを、越えることができるのだという期待を見ることができるのである。

この期待と決断とは、Aに、自然が再び△悪戯な自然▽から△慰藉の自然▽へと変化する契機となっていることを知ることができ
る。

ポストン郊外の農場での労働は、

それこそ彼の望む所だった。この自然の大きな舞踏を見ると、沈みきつた彼の心もさすがに躍り立たないではゐられなかつた。大地を何よりも愛する彼にとつて畑に出て働く程の幸福はないらしく思へた(△、▽)

という感想が表わしているように、自然に同化することのできる、そして、△彼の生命が本筋を辿つてゐるやうに▽思える、△若い彼の心には本当の若々しさが本当の道筋から頭を擡げ出したやうに思はれた▽のである。

しかし、一度狂つた人生の歯車が、再び自然のリズムと合致することによつて、正常に回転しはじめたと思つた状況も、△自然から切り取つたばかりの男たち▽、つまり△カインの末裔▽たちがさうであつたように、△その母胎なる自然と噛み合はなければならぬ運命を荷ふと同時に―人間社会とも噛み合はなければならぬ▽「自己を描出したに外ならない「カインの末裔」」大8・1」者であることを、Aは、自らの内部に見い出さざるをえなかつたのである。

労働に慣れると、烈しい一日の仕事も、夜になつてから読書もし

有島武郎研究 ―著作集第五輯「迷路」をめぐる(二)―

思索にも耽り得る餘裕を彼に残した。と同時にP夫人の胎内に向けられた焦々した配慮も甦つた。然し彼はもう徒らに煩悶するやうな事はしなくなつて、強い意志で最後の勝利を収める工夫に餘念がなかつた。

たくましく、△一人前の男▽に成長したAの内面を、有島はこのように記している。

五

突然Aは△眩暈を感じ―暗黒だつた眼の前がほのかに明るくなつたと思ふとまぎ／＼とKの顔を見た▽。この△Kの不思議な幻影▽のもたらす不安は、Kの肺結核が悪化して、ポストンのC慈恵院に収容されたという知らせによつて現実となつた。Aは、ふたたび、人生の闇に直面せざるをえない状況に立たされたのである。

△僕らの努力は総てのものを物質に還元したのだ▽というK、△愛▽や△涅槃▽は、△謂はゞ空気に色をつけたやうなまやかし物▽にすぎず、確かなものは物質であり、しかもそれは△売物だ▽というKは唯物論者である。

しかも彼は、△僕は自分の主義を働かす代りに、主義に働かされてしまつたんだ。畜生！くやしいけれども主義の腰弁になつてしまつた、いつの間にか▽、という自嘲からも明らかであるように、主
体性の欠如した存在であることをよく知つている。

Aは、このKの存在を、自らの生き方の一種の負の規範として位置づけていたのである。

彼はKの人を人とも思はぬ態度の中に、何処か弱さの潜んでるのを感じた。Kの通つた道は歩くまいといふ自信もあつた。

△Kの通つた道△とは、いうまでもなく△主義を売る△道である。そして、そこから見通すことのできる挫折への道行である。

「力があるんだからな」

Aの△囁言△のような呟きは、「首途」から引き継がれた自己認識の一面である。それは、△雪に埋れた笹△のような、内に秘めた可能性を信じようとするAの姿を表わしているところでもある。

しかし、その力が、時としては△虚無の力△、あるいは△暗い力△として感じなくてはならぬAであつたことを想起しなくてはならないのである。さらに、△「それにしても自分はどう歩けばいいのだ」△と、自己の進むべき方向性を見失つた存在であることに気づき、△もう力にも倦きた。その力が何んであるかを知るのが肝要なんだ△と、力の背後にあるエネルギーの根源を問わなくてはならぬAでもあつたのである。

P夫人の胎内に宿っている「△と思われている」Aの子供について、△自然がするやうに一とつぶしにつぶしてしまへばいい△やないか。……而してその結果に対して自然そのもの△やうに無関心でるればいい△んだ。自然がちゃんと模範を示してゐるぢやないか△、と、事もなげに一笑に付してしまふKの自然観は、一面において唯物論者の自然観でもある。そこには一種の宿命観が漂っている。

しかし、△君は自然といふ奴はどれ程贅沢な無駄遣ひをする奴だか考へた事があるかい△というKであるときに、それが、△自然といふものは贅沢な浪費を平気でするものです△（「ホキットマンに就いて」大9・11）という有島の声と響きあつているという意味で、永遠性、不滅性を本質とする自然、意志をもって働きかける自然をその内容とする神秘的自然観でもあるのである。

このことは、当然、Kが唯物論者としては、一種の逸脱した存在であることを表わしているところでもあるが、有島の唯物論的社会主義に対する批判を見ることができるところでもあろう。

換言すれば、存在の背後にあつて、それを支え、支配している意志について無関心ではいられたかつた有島の姿を見ることができるところなのである。

△人生が偶然であれ必然であれ、そんな事はどうでもよかつた△Aであるということとは、いわゆる運命論も宿命論も越える可能性を求め続けていた存在だということでもある。そのAが、△暗い力△としての運命に、△どうにもかうにも、その力に引きずられて行く所まで行つて見るより外はなかつた△という状況認識に対して、それを明確にする根源的な存在が問われなくてはならないところなのである。

六

それにしても、C慈恵院に収容されたKの断末魔の声、

「……人間は……人間は……それから……それ……」

は、いったい何を言おうとしたものなのであろう。

このところで、有島の晩年の短篇のひとつ「酒狂」〔大12・3〕を想起するのは、あまりにも唐突すぎることであろうか。

「おい、お前ごまかしても駄目だでや……俺らもお前も、この地球も何んもかも、消えて無くなるのだよ。いゝか、これも、これも、あれも〜皆んな〜……何一つ残るべき。皆んな破れてなあ……崩れてなあ……皆んな無くなつて、無くなつて、あとにたんだ一つ残るものは……おゝ死だ、死だ、死だ。Deathだ……俺らはおつかねえ。何んも無え、何んもかも無え……ごまかしてるんだ。人間は皆んな〜……俺ら何んも無え……死だけが、おい、確かなものはなあ死だけが……」

酒狂者Bの声には、人生が、人間存在そのものが、荒野であることをみごとに言い当てたことの実感がこもっているように思われる。

有島にとっては、あのKの眩きと、このBの叫びとの間には五年間という時間のへだたりがある。この時間は、有島の人間追求のプロセスとして無視することのできないものであるが、しかし、Kの眩きの中に、人生の荒野性発見の驚きと恐れとが、声にならない叫びとなって響いていないとどうして言うことができよう。

そうであったからこそ、Aは、死亡室に置かれたKの死体をおさ

有島武郎研究 ―著作集第五輯「迷路」をめぐる(一)―

めた棺を前にして、

この総てのものゝ空しきはどうだ〔ハ、〕

と、独り語らなければならなかったのである。Aを襲った思いは、△黒い空虚▽であった。一切のものが空しく過ぎ去って行く、Aを苦しめた事柄も、状況も、すべての人間関係も、所詮、それは虚しいものでしかなかった、という思いが、Aをとらえているのである。

先にも述べたように、有島に残された時間のことを思うときに、そうであるからこそ、つまり、すべてのものが、決定的にAを損うものではなかったという意味で、△総ては一場の悪夢に過ぎなかつたと喜びもしよう▽という感慨も、あるいは可能だったのである。

しかし、△然し、この悪夢を生んだ人間の心はどうだ▽、と思いかえしてみるときに、

それは何んという暗い姿だ〔ハ、〕

と、その本質における暗黒性を、彼をとりまく△黒い空虚▽の中で実感せずにはいられなかつたことは、有島の魂を蚕食しつつあつた荒野性の、ひとつの顕現でもあつたのである。

Kの死体の置かれている室の窓から仰いだ空を、

秋のやうに天は澄んで寒かつた。黎明はまだ来なかつた。黎明前

の闇は真夜中の闇よりも更に暗かった、

と書いた有島は、おそらくAの内面そのものが、この黎明前の闇であつたことを表現しなかったにちがいない。

△ただ底深い暗黒だけが彼の周囲を取巻いてゐた。その暗黒は彼の胸の中までも込み透るやうに見えた▽という有島にとって、闇の認識は、もはや逃れ難い根源的な状況認識として、有島の精神構造に定着しつゝあつたことを物語っているのである。^(注)

*

「夜だけでもせめて早く明けるがいゝんだ」

さう小さく独語ちて、彼は又窓際に行つて空を仰いだ。

Aは、△その闇の中で、逸る心をちつと押鎮めようと努めて▽、△幽かに▽、△「静かに……静かに……」▽とささやいた。

今、そのAの耳に響いてくる声は、

長いあいだ、あまりにも長いあいだアメリカよ、

平坦きわまる平和な道をずつと旅してきたあなたは、ただ喜びと繁栄だけから学んできたが、

しかしいま、ああ、いまこそあなたは進み出て、このうえなく恐ろしい運命と四つに組み、いささかも怯むことなく、苦悶の叫びから学ばねばならぬ、^(注10)〔以下省略〕

という、エピグラフに掲げられたホイットマン詩の一節ではないだ

ろうか。

有島が、△自由のない、窒息しやうな運命の牢獄、△暗黒の部屋▽にあつて、荒野に生きることを、何者かによって懲罰されている姿を象徴しているところでもある。

注

1 旧約聖書「詩篇」第三十九章六節

2 旧約聖書「創世記」第二十八章十一節―十五節

3・4 山本和「神と悪魔の闘争―荒野の誘惑と「楡山節考」―

「神と悪魔」昭32・11 創文社刊所収。なお「荒野の事態」については、△K. Barth, K. D. III / 3 S608▽との原注がある。

5 「或る女」論 (田)―後篇の蓼子―「国文学研究」第八号昭47・11」

6 山田昭夫「3 迷路」〔第三章 作品の展開、有島武郎・姿勢と軌跡〕昭48・9 右文書院刊所収

7 「饗宴」16〔「プラトン全集」第五巻 昭49・10 岩波書店刊所収〕

8 旧約聖書「創世記」第三十九章七節―十二節

9 「聖餐」論―椎名麟三「マゲダラのマリヤ」との比較を中心に―「国文学研究」第六号 昭45・11」

10 鍋島能弘・酒本雅之訳「草の葉」中〔昭45・8 岩波文庫〕

*注5・9 の各論は、拙著「有島武郎の文学」〔昭49・6、桜楓社刊〕所収論文である。